

活動報告

佐久大学における第 54 回 日本老年社会学会大会の開催報告

The 54th Congress of Japan Socio-Gerontological Society
at Saku University

堀内 ふき 征矢野 あや子 小山 晶子

Fuki Horiuchi, Ayako Soyano, Akiko Koyama

キーワード：日本老年社会学会, 老年学, 高齢者

Key words : Japan Socio - Gerontological Society , gerontology . elderly

要旨

佐久大学において、2012年6月9日（土）、10日（日）の2日間に渡って開催された日本老年社会学会第54回大会の活動を報告した。最初に、日本老年社会学会がどのように始まり、我が国における高齢者に関する様々な社会状況の変化の中で、どのような役割を求められてきたのかを紹介した。日本老年社会学会は社会学、心理学、精神医学、建築学、看護学など多職種を会員とする学際的学会であり、我が国における高齢者の増加とともに、老年学研究が進められ、看護の役割も大変大きいことを述べた。そして、長野県、佐久市、そして大学の後援を受けて、ほぼ400人の参加者と50人余の大学教員を中心とした地域を巻き込んでの大会の開催状況について、シンポジウム、ワークショップ、教育講演などの概要を述べた。今後ますます高齢社会に関する課題は増えていくことを考えると、この学会に求められるものは大きく、看護学においても、多職種と連携しながら様々な課題に取り組み、高齢者にとって最適な方法を考えていくことが重要である。

I. はじめに

日本老年社会学会第54回大会が、2012年6月9日（土）、10日（日）の2日間に渡って長野県佐久市の佐久大学で開催された。大会は、長野県、佐久市、そして大学の後援を

受け、ほぼ400人の参加者と50人余の大学教員を中心とした地域のスタッフの支援を受けて、さまざまなプログラムが展開された。

学会のメインテーマは「文化、社会そして老い」とした。地域あるいは社会の変化に対応して、文化がどのように「老い」に関連し

受付日2013年1月15日 受理日2013年2月14日
佐久大学看護学部 Saku University School of Nursing

ていくのかを考えるための大会と位置付け、そのためには高齢者に関する文化が根付いていると思われる、この佐久の地で開くことにふさわしいテーマと考えたからである。

老年社会学会は、高齢者を巡る多くの職種をメンバーとした学際的な学会である。ここに、老年社会学会とはどのような学会であるのかを述べ、第54回大会の内容を紹介し、この学会が多くの方々のご協力のもと佐久大学で開催できたことを報告する。

II. 日本老年社会学会とは

老年社会学会は、日本老年医学会と並んで、1959年（昭和34年）に設立された。1959年という、1955年頃から始まった神武景気と言われる高度経済成長時代の頃になる。高齢者生活年表（河畠ら、2001）にこの頃の状況を見てみると、1955年（昭和30年）に国民年金法が施行され国民皆年金時代が始まった時、そして、1963年（昭和38年）には「老人は、多年にわたり社会の進展に寄与してきた者として敬愛され、かつ、健全で安らかな生活を保障するものとする」と、第2条に謳われた老人福祉法が公布された年であり、高齢者を巡る様々な変革があったころになる。

日本老年社会学会の創立50周年に関する記述の中から（湯沢、2009；奈倉2009；柄澤2009）設立当初の様子を見ると、アメリカでは、1946年（昭和21年）からジェロントロジー学会が始まり、1950年（昭和25年）には国際老年学会が始まるが、そのころ日本はまだ戦後の復興を目指している時であり、老人問題は社会的関心事ではなかった。

しかし、その後10年ほどの間に、この高度成長時代は家族構成を変容させ、労働力として子供を都会に集めてしまうことになり、高齢者が子供や孫に囲まれて生活するという三世同居を減らし、高齢者夫婦世帯、独居

高齢者世帯の増加によって、否が応でも老人問題は社会問題化される。

そして、日本でもジェロントロジー学会が1956年（昭和31年）から始まるが、研究領域が広いということで、1959年に発展的に解消され、「老年文化科学部」の内容の部分が「日本老年社会学会」に、「老年医学部」の部分が「日本老年医学会」にそれぞれ独立した学会として発足し、大会は、それぞれが単独で開催するときと、両者が隔年に同時開催し、共通のシンポジウムや特別講演を行う「日本老年学会」をもつという体制になった。

この第一回大会は、1959年の11月に開かれているが、記録によれば老年学会の大会会長は塩田広重氏、老年社会学会の大会会長は、渡辺定氏、老年医学会の大会会長は緒方友三郎氏であった。そして、我が国の老年学の先覚者である、渡辺定氏（寿命学）、大間知千代氏（社会学）、那須宗一氏（社会学）、黒田俊夫氏（人口学）、橘覚勝氏（心理学）、金子仁郎氏（精神医学）、岸本謙一氏（精神医学）などの方々が理事として活躍されていた学会である。

このような老年学の歴史を担ってきた学会に、筆者の一人である堀内が会員として関わるようになったのは、東京都老人総合研究所一現在の東京都健康長寿医療センター研究所に勤務した1980年（昭和55年）からで、設立から20年ほどたってからのことである。この頃は、東京都老人総合研究所の開設時に副所長であった那須宗一氏が学会会長で、学会事務所も東京都老人総合研究所にあって、その名簿管理や大会案内などの事務を一部手伝っていたことを思い出す。その頃はまだ学会員は700人ぐらいだったと思うが、その後学会活動は活発になり、学会誌も1979年から発刊された。この時の学会誌創刊号に、那須宗一会長が創刊の言葉を載せている。この言葉は、老年社会学会が目指しているもの、進むべき道を示してくれているが、そればかり

りでなく、老年学、高齢者に関わる全ての専門職が目指すべき姿勢を示してくれていると、思っているので、ここにそのまま紹介する(日本老年社会学会)。

『人間の老化現象を組織的かつ総合的に研究するようになったのは、そんなに古いことではない。アメリカでゼロントロジイという学名が学会で市民権をえたのは1944年だとされている。本誌の編集母体である日本老年社会学会が正式に発足したのは、1958年のことであった。

そもそも老年学は、老化の生理的レベルや行動レベルや生活環境レベルの研究など、それぞれの専門分野からのアプローチを必要とすることはいうまでもない。だが、どのレベルの研究にしても、老年ないし老人を *as a whole* として統合的にとらえなければ、いかえれば他の専門領域との共同研究や情報交換がなければ、その本質を解明できない性質をもっている。

とりわけ老人の社会科学的研究は、これまで常識とされてきた老人観への科学的疑問から発想して、実践的にも社会に寄与できる実証的研究を志向しなければならない。つまり老人処遇の現状への反省と未来への政策的志向が期待されているのである。

日本老年社会学会は歴史的には日なお浅いが、それでも今年で21年目を迎えるに至っている。成人期に入ったのである。そこで学会20周年を期して、これまでの学会年報が各年次の大会報告要旨集と変らず、学術誌として形式と内容を十分備えていなかったのを、これを発展的に解消した。そして会員はいうに及ばず広く老化ないし老人問題に関心のある実務者や研究者に最新の研究成果や研究情報を提供できる学術研究誌にあらたに変身することになった。

本誌が単に大会報告誌に終始することなく、国際的な評価に耐えうる、質量ともにすぐれ

た老年学研究の学術研究誌として発展することを心から期待してやまない。

1979年9月1日

日本老年社会学会会長 那 須 宗 一』

その後機関誌の編集委員、そして2006年からは機関誌担当理事、2010年からは総務担当理事として関わることになり、2012年の第54回大会の大会長の役割を担うことになったのである。

日本老年社会学会は学際的な学会だと前述したが、設立当初は日本老年医学会と二つの合同の日本老年学会であったものが、その後、日本基礎老化学会、日本老年歯科学会、日本老年精神医学会、日本ケアマネジメント学会が参加し、2011年の合同学会からは、日本老年看護学会が参加し、7学会を含むものとなった。2011年の日本老年学会は、日本老年社会学会としては第53回の大会、日本老年看護学会は第16回大会であり、日本老年社会学会の歴史の長いことがわかることと思う。

日本老年社会学会の会員には、本来の専門領域の学会に所属しながら、老年学の課題を関連領域との協働のもとに解決しようとしている会員が参加していると言える。その意味では、看護職も、日本老年看護学会に所属しながら日本老年社会学会にも参加しているものが少なくない。高齢社会のさまざまな課題は、その専門性を深めることも大事であるが、それらの知見や情報を他の領域と共有し、高めあいながら社会に示していこうとしているのである。

会員のそれぞれの専門的背景は、看護学、社会学、社会福祉学、精神医学、公衆衛生学、心理学、教育学、建築学、栄養学、法学、哲学、歴史学など多岐にわたっている。そして、それらの分野すべてにおいてさまざまに連携しながら協働した研究、討議を目指しているのが特徴である。

現在会員数は約1500人と必ずしも多くはないが、大会での異なった学問領域の交流や議論の展開、そして、年4回の機関誌は非常に質の高い充実した論文が掲載される機関誌として評価されている。

また、日本老年学会に所属することは、国際老年学会に所属することであり、アジア・オセアニア老年学会と国際老年学会が4年に一回ずつ開かれるが、これにも日本から多くの研究者が参加している。地球規模で起こっている高齢者に関する課題の解決を他の国々と討議し、日本の高齢者問題を他国に生かしていくことを目指している。

Ⅲ. 第54回日本老年社会学会大会の内容

第54回大会を、佐久の地で多くの方々に協力してもらいながら開催できたことは大変有意義であった。

まず、実際にどのようなプログラムが展開されたのかを紹介する。

隔年で開かれる合同大会の時は7学会が一同に会するため、通常は東京、大阪、札幌など大都市で開かざるを得ない。そしてほぼ全部がポスターセッションになる。それに対し、単独開催の時は主に地方で開催され、内容も教育講演や一般演題も口演を多くする。地方の研究者にもさまざまな研究成果を知ってもらう機会ともなることを目指し、新しい知見をその道の第一人者とされる学会員から提供できるよう、教育講演が多く展開されという特徴がある。

第54回大会もこのような本部の大会の在り方を受けた形で会議の運営を考えながら、佐久の地で開催した。大会の内容について、抄録集（日本老年社会学会, 2012）を参考にしながらご紹介する。

1. 特別講演

特別講演は2題であった。特別講演Ⅰは佐久市長柳田清二氏による、「世界最高の健康都市を目指して」と題して、歓迎の言葉も含めて話された。農村医療でも有名なこの佐久市が持つ世界最高健康都市への素地として、出生率の高さや健康で長寿なお年寄り、低い医療費、地域と一体になった保健予防活動の実践などがあること。そして、世界最高健康都市の目標を「市民一人ひとりの健康感・幸福感・住みやすさ感」をあげ、それを市民一人ひとりが感じることでであると話された。具体的な事業展開などについても、保健活動や自殺根絶に向けた実践などを具体的に言及された。

特別講演Ⅱは、小澤利男氏（東京都健康長寿医療センター名誉院長、高知大学名誉教授）による、「老いるということ—成人病予防（佐久市）から介護予防（高知県香北町）へ—」と題した講演であった。小澤利男氏は佐久市との縁があることから、この特別講演を快く引き受けてくださった。1968年（昭和43年）の北佐久郡東村（現在の佐久市）における脳出血予防のための住民健診を、国保浅間病院院長の吉澤国男氏とともに関わり、脳卒中を激減させることができたことを話された。また、高知県香北町における老年医学的総合機能評価（CGA）を使っただけの健康長寿計画への関わりなど、広い視点からのこれまでの取り組みと今後の課題を示された。このCGAは、英国、米国で開発された手法であるが、生活機能を包括的に多分野から評価するという方法で、筆者も学部・大学院教育で紹介しながら、総合的にアセスメントするためのツールとして紹介し、その視点を活用している。看護においては、そもそも人を一面だけではなく、総合的にアセスメントすることは大切な視点と言われており、実際に多面的にアセスメントすることを行っているが、看護領域だけではなく、医学やリハ

ビリテーション領域でも、重要な視点として認識されるようになったのは、この小澤氏の功績が大きいと思っている。

2. シンポジウム

シンポジウムは2つ企画された。シンポジウムⅠは、「次世代の健康長寿は可能か」をテーマに、岡田真平氏（公益財団法人身体教育医学研究所）と筆者の一人である征矢野あや子（佐久大学）によって企画され、次世代にも健康長寿を叶えていけるのかについて、健康長寿県・長野の取り組み、保健補導員制度、心の健康など、有意義な討論が展開された。

最初のシンポジストは『健康長寿県・長野』のこれまで&これから」と題した、長野県健康福祉部健康長寿課長の小林良清氏による講演であった。長野県の健康指標について、がんの死亡率が低いこと、自殺による平均寿命への寄与率が高くなってきていること、老人医療費が低いこと、高い就業率があることなどを紹介した。そして「自分の健康は自分で守る」という言葉で保健師活動がなされてきたこと、保健補導員や食生活改善推進員等長い歴史の保健活動が健康長寿の背景にあることを説明した。一方、最近が高齢者の平均余命の本県の全国順位は低く、100歳以上の高齢者の人口割合も高くないことから、「果たして本県は本当に健康長寿といえるのか？」と話し、今の高齢者や次世代の健康問題を解決し、健康長寿を達成するには、年代別の分析をしていく必要があることを指摘した。

次いで慶応大学大学院政策・メディア研究科研究員の今村晴彦氏による、「健康長寿を築き上げた信州人の文化・社会—長野県保健補導員制度からの考察」と題しての講演であった。長野県の医療費が安い理由の1つは「活発な保健活動と生きがいを持つ高齢者の生活」であるとし、これを象徴するのが保健

補導員制度であるとして講演した。保健補導員制度の歴史について、これまで継続されてきた地域の仕組みなどを紹介しながら、現在はまた、なり手が少なくなっているなどの課題も述べた。そして、次世代の健康長寿には、この制度の過程や仕組みを振り返ることで学べるのではないかと話された。

次は島根大学大学院医学系研究科、日本学術振興会特別研究員の鎌田真光氏による、「次世代の健康づくりⅠ—身体活動の促進と運動器の健康づくり—」であった。鎌田氏は、身体活動や運動器の健康づくりは健康長寿の必須要件で、高齢期に自立した生活を営むためには運動器を健全に維持しておくことが重要であるが、日本人の平均歩数は社会の利便性が高まる中、非活動的な生活になり、下降傾向が続いていることを指摘した。そしてその傾向は地方において顕著であることをデータから示した。身体活動を促進するためには、正しい知識を普及すること、ターゲットを明確にしてアプローチをしていくこと、都市計画など環境への介入も必要であることなどを述べた。

次は「次世代の心の健康といのちを支えるために」と題して、公益財団法人身体教育医学研究所研究主任の朴相俊（パク・サンジュン）氏による、心の健康づくりの側面からの講演であった。自殺の現状や世代別の特徴などをデータで示し、婚姻状況や景気変動と自殺率が関係していることについても解説した。そして東御市での心の健康づくりの取り組みを紹介しながら、家族や地域の絆力を高めていく重要性を指摘した。

最後は、社会学の立場から学習院大学大学院政治学研究科の新雅史氏による、「次世代の健康づくりⅠ—中間集団の衰退と『健康づくり』の個人化—」と題した講演であった。新氏は、地域で専門家によるさまざまな健康づくりが行われているが、それに応えない主体がいること、とくに壮年男性の問題を取り

上げた。また、現代は個人単位での健康づくりが進んでいることを指摘し、健康だけにアプローチするのではなく、職場や地域社会における関わりを一緒に考え、健康プラスαの機能をもつ空間を構築していく仕掛けが必要ではないかと述べた。

シンポジウムⅡは、「老人の力」と題して、長田由紀子氏（聖徳大学）と伊波和恵氏（東京富士大学）によって企画された。

最初は、桜美林大学大学院老年学研究科の石原房子氏による、「老人の力—レジリエンスの視点から—」と題した講演であった。レジリエンスという言葉は、困難な体験からの心理的回復とされ、研究としてはまだ新しいものである。これまでは幼児から大学生までを対象とした研究が主であるが、これを高齢期の喪失体験や身体機能の変化、社会的役割の変化などにどう向き合い生きていくかを理解するうえで有用な視点ではないかと提案した。レジリエンスを発達への力として捉え、高齢期の心理的発達にどう影響を与えるのか検討していくことの必要性を述べた。

次いで、筑波大学大学院の安梅勅江氏による、「高齢者の力を最大限に引き出す『エンパワメント科学』の視点から」と題した講演であった。エンパワメントは、力を引き出すこと、元気にすること、きずなを育む力を発揮すること、そして共感ネットワークを形成することを意味するとしている。そしてエンパワメントには、セルフ・エンパワメント（自分力エンパワメント）、ピア・エンパワメント（仲間力エンパワメント）、コミュニティ・エンパワメント（組織力、地域力エンパワメント）の三種類があるとし、これらを有機的に絡めて活用することで効果は高まるということを述べた。

東京都健康長寿医療センター研究所の増井幸恵氏は、「老年的超越からみた老人の力—超高齢期の身体状況の悪化を乗り越える力—」と題して講演した。増井氏は、超高齢者

への面接調査の研究を通して、超高齢者には身体機能や活動機能の低下があっても精神的安定を保つ力があると述べた。そしてこの力の根源として想定されるのが、Tornstamの提唱による老年的超越であるとした。そして老年的超越は「自然な加齢」に伴って発達する可能性が高く、「老人ならではの力」と言えるのではないかと述べた。

最後は、Department of psychology, Northeastern Illinois University の Masami Takahashi 氏による、「超高齢化社会の Unsuccessful Aging 考—『老人力』と『叡智』の見地から—」と題した講演であった。サクセスフルエイジングについてその由来と変遷について述べ、サクセスフルエイジングを障害や喪失をも含んだよりダイナミックなエイジング過程の中で捉え、叡智についても、機能主義に捕らわれることなく、老人の持つ力をポジティブにとらえた包括的な叡智のパラダイムであることについて提唱した。

これまで言われているようなサクセスフルエイジングのパラダイムであると、とかく看護職が対象としているような虚弱な高齢者にそぐわないものであった。それを老人力というパラダイムが示されたことは、今後の老人力を考えていくうえで、大変興味深いものであった。

3. ワークショップ

今回の大会を開催するにあたって、看護職である筆者らの立場からすると、参加者も地域の看護・介護職の参加も多いであろうことが想定されたため、「高齢者の施設ケア—ターミナルケアを中心として—」と題し、北海道医療大学の山田律子氏と佐久大学の犬淵律子氏をコーディネーターとして、企画運営してもらった。

最初は、NPO法人なずなコミュニティ看護研究研修企画室の堀内園子氏による「最期まで自分の『場』をもてるために—グループ

ホームにおける緩和ケアと看取り—」と題して、実際にどのような実践がなされているかが紹介された。

次いで、ジェイエー長野会特別養護老人ホームローマンうえだの櫻井記子氏による「特養ショートステイ利用者の終末期支援」と題した実践からの話であった。ショートステイは家族のレスパイトの役割が求められるばかりではなく、入所者と同様に終末期のケアを受け持ち、入所者への終末期支援の体験を生かして、ショートステイ利用者にも地域包括支援の中で実践されているということであった。

次は北海道医療大学の山田律子氏による「高齢者のターミナルケアにおける食事支援」についての内容であった。アルツハイマー型認知症の経過と食生活の変化を示しながら、原因疾患や医療者との連携、胃瘻との関係、意思決定などの内容を含めたこれまでの研究を生かした講演であり、チームアプローチの必要性についても話された。

最後は佐久大学の太田律子氏による「高齢者の終末期ケアにおけるチームケア」であった。高齢者の終末期ケアには、本人、家族、看護職、介護職、医師、栄養士などのチームケアが重要であること、そして看取りケアを振り返り、その人にとっての終末期ケアのプロセスを考えることの必要性について述べられた。

これらはすべて大変実践的な内容であり、多くの参加者によって活発なディスカッションが行われた。

4. 教育講演

単独開催の時は、多くの教育講演を企画すると前述したが、今回の大会でも全部で11の教育講演を開催した。日本老年社会科学会の会員にはそれぞれの領域の第一人者ともいわれる人たちが多く、若手会員のために、また会員以外の参加者のために、多くの研究を

背景にした知見を紹介することができるからである。

2日間にわたって、1つの会場を教育講演専用として、1時間ずつの講演を開催した。

認知症介護研究・研修東京センターのセンター長である本間昭氏による「認知症の薬物療法」では、4つの治療薬について紹介と意義について述べられた。薬剤が開発されることによって認知症に対する人々の考え方が変わり、告知と言った課題も起こってきている。薬剤をどのように活用して認知症の治療をするか、ケアにおいても薬剤を活用することの重要性が理解できた。

「量的研究—よい研究を生む秘訣はモデルと測定—」は、聖学院大学人間福祉学部の古谷野亘氏が講演し、研究を進めるうえでの考え方、モデルの作り方、変数の置き方など、丁寧な指導があった。

「質的研究法—ソーシャルケアサービスにおける実践研究への適用と研究成果の応用—」については、国際医療福祉大学医療福祉学部の小嶋章吾氏が講演した。質的研究方法の全体像、事例研究法、グラウンデッド・セオリー・アプローチなどを中心に具体的な実践を紹介しながら講演された。

「認知症の人の尊厳」については、日本社会事業大学大学院福祉マネジメント研究科の今井幸充氏が講演した。認知症の人への尊厳を支えるケアとはどのようなケアかについて、以下の4点—①基本的人権の享有を妨げないケアでその固有性・不可侵性・普遍性を念頭に置いたケア、②安寧を最優先したケアで、彼らの継続的な生活を支援する、③認知症者の持っている力を十分に発揮できるケア、④クライアントの考えや自己決定、自己責任を尊重し、それを擁護するケアをあげ、専門職としての姿勢を求めた。

「回想法—人・時・地域を結ぶ—」については、東洋大学ライフデザイン学部の野村豊子氏が講演した。我が国に回想法を導入し、

さまざまに実践してその評価を研究報告する中から、特に地域における展開に焦点を当てて話された。

「アクションリサーチによるまちづくり」については、桜美林大学大学院老年学研究科の芳賀博氏が講演した。高齢になっても住み慣れた地域で安心して暮らし続けるためには、共に支え合う地域づくりが必要であり、そのためにはどのようなアプローチが有効なのかについて話された。地域全体を視野に入れた転倒・閉じこもり予防のための介入研究と社会参加のための介入研究を例に、アクションリサーチの実際を講演した。

「都市と農村における高齢者の孤立化」については、東京経済大学現代法学部の奥山正司氏が講演した。地域社会や家族の在り方が変化している中で、都市と農村の孤立化の課題を比較しながら話され、地域社会の捉え方を社会的な視点から整理し、高齢者の生活と孤立化について話された。

「団塊世代のリフォーム—住み続けられる住まいをめざして—」については、NPO法人高齢者の住まいをつくる会の田畑邦雄氏が講演した。高齢期における住まいはどのような場となるのか、団塊世代が高齢期を迎える今、どのように備えていったら良いのかを、実際の改修例などを示しながら丁寧に話された。

「高齢者虐待を考える」は、東北福祉大学総合福祉学部、認知症介護研究・研修仙台センターの加藤伸司氏によって講演された。多くの虐待に関する調査研究データを示しながら、高齢者虐待は不適切なケアの延長線上にあること、虐待を防ぐためには個人の取り組みだけでなく、組織全体として取り組むことが重要であると述べられた。

「介護ストレスを再考する—在宅介護と施設介護の問題—」については、北西学園大学文学部の田辺毅彦氏が講演された。在宅介護負担ストレスと高齢者介護施設スタッフのス

トレスについて研究を紹介しながら、それぞれの低減のための課題を話された。

「高齢者犯罪の現状と課題」については、追手門学院大学社会学部の古川隆司氏が講演した。高齢者犯罪が増加傾向にあることの要因は何か、学術研究を進めることの意義は何かについて、その人の人生の過程、生活構造との関連などを通して話された。実際に高齢犯罪者へのインタビューを重ねるといふ、貴重なデータから明らかになってきたことを紹介しながら課題を述べられた。

以上のような、広くまた多くのテーマで教育講演が企画され、若手研究者や非会員などから大変好評であった。この企画は、多くの積み重ねられた研究成果が他分野までも広く知られていく良い機会になっていることが確認され、日本老年社会学会では今後も大事にして企画を進めていくことになるであろう。

5. 一般演題発表

一般演題は117題の発表であった。合同開催の時には全てポスターとなることから、今大会では大学の講義室を多く活用できるメリットを生かし、全て口演となった。内容は、大変多岐にわたっていたが、カテゴリーとしては、①認知機能・認知症、②QOL・満足度・幸福感、③療法・セルフヘルプ、④ターミナル、⑤介護保険・介護サービス、⑥住環境・生活環境・福祉用具、⑦施設機能・ユニット、⑧高齢者の権利擁護・虐待、⑨介護者、⑩就労・社会参加といった内容であった。

老年看護学会が出来てから看護職による発表はあまり多くないように思うが、共同研究者であるものも含めると、12~13題程度が看護職の共同研究者のものや、筆頭発表者であった。内容は、看護職による認知症高齢者ケアの認識、認知症高齢者ケアの充実感に関するもの、東日本大震災の在宅高齢者への影響、要介護心疾患高齢者に対する他職種連携、在宅看取り支援、社会的ネットワークの種類

と心理的ウェルビーイングなど、さまざまなフィールド研究を、共同研究という形で発表しているものが主であった。

6. 奨励賞受賞記念講演

日本老年社会学会では、毎年研究者の中から奨励賞の受賞者を選考しているが、大会においてその研究者の授賞式と受賞記念講演が企画される。

今回の受賞者は、駒澤大学文学部の荒井浩道氏、日本福祉大学社会福祉学部の斉藤雅茂氏、東京都健康長寿医療センター研究所の増井幸恵氏であった。

荒井氏は、「ソーシャルネットワークにおける困難事例への支援に関する研究」、斉藤氏は「高齢者の社会的孤立研究の主要な知見と課題」、増井氏は、「超高齢期の機能低下への適応における老年的超越の役割」と題して講演があった。

どれも若手研究者による新しい知見のある、今後の活躍が期待される研究であった。時間も3題で2時間弱が用意されており、研究の準備から研究方法、結果、考察、今後の課題まで含めた深い内容であり、大学院生や若手研究者などにとっては、今後研究を進めていくうえで大変役に立つ発表内容であった。

IV. おわりに

わが国における高齢者を取り巻く課題はますます大きくなっている。日本老年社会学会のような学際的な学会において、看護職も多職種と連携しながら、高齢者のより良い生活を目指した老年学研究を進めることは大変重要なことであり、この大会を通して、さらなる研究課題に取り組む必要性を示すことができたのではないだろうか。そして歴史あるこの日本老年社会学会の大会を、この佐久の地で開催できたことは、大変有意義であった。

参加者は会員が240名、非会員が110名、そしてスタッフとして活動しながらの参加者が50余名と、全部でほぼ400名が参加するという盛況な学会であった。特に、非会員が多かったということは、地方で学会を開くことによって、地域の研究者や学生、実践者が知的刺激を得る機会になるという目的の一つが達せられたのではないかと思っている。そしてそれぞれの地域における実践が今後は何をめざし、どのような社会構築に向かっていくのか、佐久、長野、日本、世界への広い視点で有意義な討論ができた学会であった。

懇親会は軽井沢プリンスホテルでほぼ100名の参加者と招待者によって開かれた。生演奏をバックに楽しい食事と交流の機会となっていた。また特別講演やシンポジストをしてくださった方、口演の座長を担当してくださった方々には、“握り石”という記念品が渡された。この握り石は、2011年の震災や原発事故で、気持ちが沈んだり不安定になっている方々に、少しでも落ち着いた気持ちになってもらいたいと願って、東御市の工房主催者である羽田龍史氏が、小石に生命の象徴である“植物の妖精”と永遠に変わらぬ“星”を一つずつ描いたものである。この握り石の願いが伝わることを願っている。

今回の大会運営は、参加者や本部からとても活発で、おもてなしの心のある学会であったと高く評価された。

東京から新幹線で1時間15分ほどのところにあり、大学事務局の協力を頂いてスクールバスを出してもらったこと、地域の商工会の方々のご協力により、お土産や昼食の準備がされたことなどの点も良かったようである。地域を含め、大学全体で協力運営していることが良くわかったとの言葉であった。

最後に、大会企画運営委員として助けていただいた、小山智史氏、浅野均氏、七田恵子氏、大淵律子氏、そして多くの大学教員関係者の皆様方、学生のボランティアなど、佐久

大学を挙げての開催が出来ましたことを、心から感謝申し上げます。

文献

柄澤昭秀 (2009). 日本老年社会科学会と私. 老年社会科学, 31(1), 43-44.

河島修, 原美薫, 島村節子 (2001) / 日本福祉文化学会監修, 高齢者生活年表, 1925-2000年, (増補版第一版) 東京: 日本エディター

スクール

奈倉道隆 (2009). 学会発祥のころを訪ねて, 老年社会科学. 31(1), 83-85.

日本老年社会科学会 (2012), 老年社会科学, 34(2).

日本老年社会科学会, 2012/1/13, <http://www.rounenshakai.org>

湯沢雍彦 (2009). 老年学会発足と渡辺定先生, 老年社会科学. 31(1), 40-42.